

コマンドルスキー諸島
ベーリング島南部にあるベーリングたちの墓



もっとも典型的なハーレム



新生児の数を死亡したものも含めて正確に数える。
個体数の推移を予測する重要な仕事



間引いたオス。毛皮、生殖器をとった後の
肉は飼育用のキツネの餌にする



新生児の10パーセントほどに、日時や場所を記した
モネル合金の標識を付ける

オットセイ Northern fur seal (学名: *Callorhinus ursinus*)

一夫多妻の鳍脚(ききやく)類。サハリンのチュレニイ島、ベーリング海のコマンドルスキー諸島とプリピロフ諸島で繁殖し、個体数は約120万頭と推定されている。5月中～下旬にかけてオスが上陸してナワバリを作り、6月中旬に帰ってくるメスを待ち受ける。上陸して1～2日でお産、その後約1週間で発情・交尾・妊娠する。授乳しながら、胎児を育てる。10月下旬に子育てを終え、皆それぞれ繁殖場ごとに、カリフォルニア沖、三陸沖、日本海の大和堆へと大回遊の旅に出る。

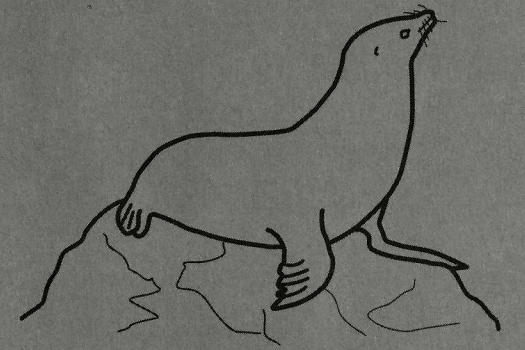


毛皮の発見と乱獲

オットセイが毛皮資源として注目を浴びたのは、ロシア皇帝ピョートル大帝が委嘱したスウエーデン人の海軍大佐、ベーリングの第二次探検がきっかけであった。一七四一年にかるうじてたどり着いたロシアのベーリング島で越冬に失敗したベーリングを初め、かなりの隊員が壊血病で亡くなった。そのような過酷な環境のなかで生き残った隊員たちが、手付かずの資源としてラッコやオットセイの毛皮をもち帰ったのである。

その数年後に始まった猟獲ラッコは両種にとって受難の始まりであった。ベーリング・メドヌイ両島のラッコは一〇年も経ないで絶滅に至り、その後はロシア人によるアリューシャン列島沿いの狂気の猟業活動が続いた。ラッコが獲れなくなれば、追うようにオットセイが同じ憂き目に遭った。一八〇〇年代には露米会社が、当時ロシア領のアラスカに至る広大な植民地経営も兼ねて、毛皮の市場価格の暴落を防ぐために猟獲数制限など多少の管理をおこないだした。

このように陸上での猟獲がある程度管理され出すと、一八六六ころから海上での猟獲が始まり、陸上の猟獲を上回る水準に達するにそれほど時間がかからなかった。繁殖場をもたなかったイギリスは、プリピロフ周辺海域での猟獲を強行し、米英両国の裁判沙汰にまで発展した。その結果、英国の猟船は拿捕を免れるようになったが、繁殖場周辺海域の猟獲には繁殖期に制限が設けられた。そして、サケ・マスなどを含む河川遡上性の魚を管理する国の海上管理権を認める母川国主義の考え方が初めて導入された。



オットセイの受難

和田 一雄
(わだ かずお)

元東京農工大学教授

オットセイの生態管理

生態管理体制が少しずつ整備されるにつれて、生態研究も進み始めた。メスの出産率は七〇～八〇パーセントとかなり高いため、個体数を維持しながら毛皮資源を維持するには三～五才のオスだけを一定数捕獲しなければならぬ。捕獲数を抑えすぎるとオスが増えると、繁殖場で新生児を踏み潰したり、メスのとり合いで、メスの死亡率が増加したりする。そんなときにはハーレムをもつ成獣オスやハーレムをもたない未成獣オスを間引くことになる。なお、間引いたオスの毛皮は市場に出荷され、生殖器は乾燥後漢方薬用に輸出、肉は地元で養狐業者に払い下げられる。自然増加率の推定は困難なので、試行錯誤の連続である。ハーレムをもつ成獣オスは繁殖期になるとほとんど絶食してハーレムを維持するが、メスは採食のために定期的に海へ出る。